

勾玉作りから学ぶこと

「ほっとやまはく」

タイム②①



館に勤務する学芸員の資格を取得するために必要な単位の一つで、資料の取り扱い、受付や図書の整理、お客さまへの対応など博物館のさまざまな業務に対する理解を深めるとともに学芸員の仕事を一緒に作業をしながら学んでもらうためのものです。

勾玉をつくろう！

県立山口博物館で今月28日まで開催していた特別展「ふしぎ！おどろき！大動物展」にコロナ禍の中でも多数のご来館ありがとうございました。当館には、こうしたお客さまの他にもさまざまな人が来られています。ちょうど、夏休みということもあり、今月初めには1週間ほど、大学生が博物館実習に来ていました。

博物館実習とは、博物

今月5日には、当館の教育普及講座「勾玉（まがたま）をつくろう！」の準備や参加者への対応など、博物館の現場ならではの体験を提供する機会がありました。まずは、材料の準備から。講座で作る勾玉の材料は、とても軟らかく加工のしやすい滑石です。講座の参加者には小学生から大人までさまざまな年齢の方が



教育普及講座「勾玉をつくろう！」の一コマ

アクセサリ、権威、祭祀

講座が始まり、勾玉の歴史について簡単に説明した後、滑石を配ると約1時間かけて大人も子どもも無心で石を削り続けていきます。大学生は、やすりの使い方やスピードアップの工夫などを参加者に伝えて、作業をフォローしてくれました。こうして、参加者の一人一人の勾玉が出来上がります。

さてこの勾玉ですが、一般に知られている形は、写真のようにアルファベットのCのような形です。丸く膨らんだ片方



完成した勾玉

また「魏志倭人伝」には、卑弥呼の跡を継いで女王となつた耜耜（イヨ）が「青大句珠」（青い大きな勾玉）を晋に献上したとの記述があります。奈良時代に仏教が入ってくると古墳時代以前からの装飾品は姿を消していきますが、その中でも勾玉は、現代にまで祭祀（さいし）品としての役割を担っています。

三種の神器「八尺瓊勾玉」

その代表的なものは、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）です。八咫鏡（やたのかがみ）、草薙剣（くさなぎのつるぎ）とともに、天皇位の象徴とされる三種の神器の一つであり、皇位継承の証となってきました。

源氏と平氏の争いを描いたドラマなどでよく知られている場面の一つである、1185（元暦2）年の壇ノ浦（現在の下関



田布施町御蔵戸古墳群出土の勾玉（県立山口博物館所蔵）

市）の合戦において、平家が滅亡を迎えた際、二位の尼（平清盛の妻時子）は安徳天皇を抱え、剣と勾玉を携えて海に飛び込みました。この時代には、すでに勾玉は個人の装飾品ではなく、権威や伝統

を支えるアイテムとしての役割が大きくなっていたのです。

勾玉作りに費やされた労力

講座では、勾玉の歴史的な知識を学び、誰でも短い時間で勾玉を完成させることができました。さらにきれいな石を探し、硬い石を削って形を整え、穴を開けるといって一連の工程を学ぶ中で、古代の人々が勾玉を作ったりに手に入れたりの労力はいかほどであったの

の先端に穴を開けてひもを通し、首飾りのように使われました。この形の

ルーツは、動物の牙、胎児、釣針、月など諸説あり、よく分かっているいません。それだけ多くの研究者が各自の考えを持っているということでしょう。材質は、ヒスイやメノウ、水晶、琥珀（こはく）などさまざまな種類の石だけではなく、土、ガラスなどでも同じ形の勾玉が作られてきました。日本において、勾玉は、約5000年前（縄文時代中期）ごろには出現しており、弥生時代や古墳時代の有力者の墓などから多く見つかっています。

か、と考えるとまた違う見え方ができるかもしれません。

阿部来（学芸員・考古担当）

▽次回は9月14日です。

山口県立山口博物館
TEL083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで

